

FOYER



Let's talk about the future
of the stage.

TALK SESSION

利用者座談会

「舞台のミライを語ろう」

ホワイエサロンコンサート vol.1

有島京&伊藤悠貴
デュオリサイタル

国内外で活躍する熊本のアーティストがこぞ参加

多彩なコンチェルトの数々を
オーケストラと協演

山下 一史 (指揮)
小野田 美緒 (ピアノ)
佐藤 晋 (チェロ)
田尻 大真 (トランペット)
柴田 恵奈 (ヴァイオリン)
春日 保人 (バリトン)
赤池 優 (ソプラノ)
正源 司 有加 (ピアノ)
松本 貴文 (バス)
岩本 貴文 (バス)
樹原 孝之介 (作曲)
山下 一史 (指揮)
小野田 美緒 (ピアノ)
兼武 尚美 (メソソプラノ)

ふさとの宝を!
コンサート Vol.5
～復興から未来へ～

2022年7月17日(日)
13:00 開場
13:30 開演
16:30 終演予定

熊本県立劇場コンサートホール
全席自由 一般 2,000円 / 大学生以下 1,000円
※大変恐れ入りますが未就学児のご入場はご遠慮ください

プレイガイド
熊本県立劇場
熊日プレイガイド、大谷楽器
チケットぴあ
(Pコード 218-529)
ローソンチケット
(Lコード 81590)

【主催】ふるさとの宝を！コンサート実行委員会
【ご予約・お問合せ】B・Mプロデュース:090-4343-3105 (春日)、Comodo arts project:096-288-4635 (平日 10:00~18:00)

熊本県立劇場
KUMAMOTO PREFECTURAL THEATER

【企画・発行】
公益財団法人 熊本県立劇場
熊本市中央区大江2-7-1 〒862-0971
www.kengeki.or.jp

【編集・制作・印刷】
株式会社 ジャム
熊本市中央区練兵町45早野ビル1階 〒860-0017
www.jam-cf.com

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ 2022 summer 発行日:2022.6.20 ※掲載内容は5.31現在のものです。

Let's talk about the future of the stage.

池田美樹…演劇界では、活動はずいぶん通常に戻りつつあるような印象ですが、集客についてはまだまだ。ただ「コロナ禍で劇団って大変でしょ?」と言われるのがもうイヤになっていて、若手といっしょに積極的に活動しています。

コロナ禍が芸術文化に影響したこと

熊本県立劇場の40年の歴史は、ひとつの公演一人ひとりの感動の積み重ね。そして、熊本で活動する文化芸術団体と一緒に歩んできた歴史でもあります。2020(令和2)年から続く新型コロナウイルス感染症の広がりは、文化芸術団体にとって公演の中止や延期を余儀なくされ、活動に制限がかかるなど大きな影響がありました。今ポストコロナ時代に向けた芸術文化のあり方を考えるステージへと変わりつつあります。今回の特集では、熊本県立劇場の利用者である文化芸術団体の方たちに、コロナ禍を経て感じること、これからの舞台のミライについて語り合っていました。

池田…合唱は口の動きがとても大事ですからね。新規の団員や生徒集めについてはどうですか?

上村…大学って、入学式で新入生に対して勧誘するじゃないですか。映

松本強一…それは合唱の指導でも同じです。最近では合唱用に下が開いているマスクがありますが、指導する際には口の動きを見たいのです。それが、マスクによって見ることができません。

伊沢由紀恵…企画していた舞台や公演の中止・延期はもちろんですが、マスク着用での練習の影響が大きいですね。子どもたちに指導する際、表情が見えない。バレエはセリフがないので、顔の表情が命。教える側も目の表情でしっかり伝えるように心がけてはいますが。

上村大志…大学入学のタイミングがコロナが広がりはじめた時期なので、演奏活動自体が制限されているのがスタンダード。以前は演奏旅行があったり、地域との交流が盛んだったと聞きますが、それができないのが残念です。

伊沢…バレエ教室は、通常のレッスン以外で体験レッスンを設けるのですが、その体験レッスンを担当する指導者が不安がるのです。体験レッスンは全く知らない人たちが集まる場なので、そこで指導するのが不安だ、と。ふだんのレッスンはつきあいが長い生徒たちで、安心できるからです。その不安の壁を乗り越えるまでは、新しい生徒募集をかけられないのが現状です。

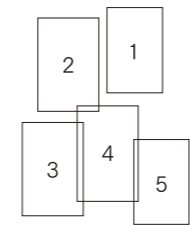
松本…合唱の場合は、練習する時に窓を開けて、外に聞こえるくらい大きな声で歌って、新入生を勧誘したものです。うなぎ屋の煙みたいに「ここに合唱部があるよ」と知らせるわけですね。それが今はやりにくい。

比嘉渚…私は大学のサークル活動状況を知らず、2年次になって入部しました。今の新入生勧誘は、TwitterなどのSNSで。歓迎はZoomです。

画とかドラマのシーンでしか知らないですが(笑)。私はそれを経験していないので新入部員の勧誘の方法がわかりません。今はチラシひとつ配るにも、大学の許可が必要ですよ。

members

1. 松本 強一 [まつもと きょういち] デメーテル男声合唱団常任指揮者
2. 比嘉 渚 [ひが なぎ] 熊本大学フィルハーモニーオーケストラ
3. 伊沢 由紀恵 [いざわ ゆきえ] エコール・ド・バレエ・クラシック主宰
4. 上村 大志 [かみむら たいし] 熊本大学フィルハーモニーオーケストラ
5. 池田 美樹 [いけだ みき] 劇団きらら代表



芸術文化のコラボレーションは、観ている人にも刺激になる。



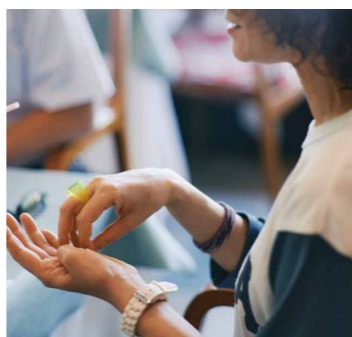
TALK SESSION

「舞台のミライを語ろう」利用者座談会



生の音楽にふれた時に感動した経験を子どもたちに伝えていきたい。

舞台芸術の根っちは、
なんらかの形でつながっている。

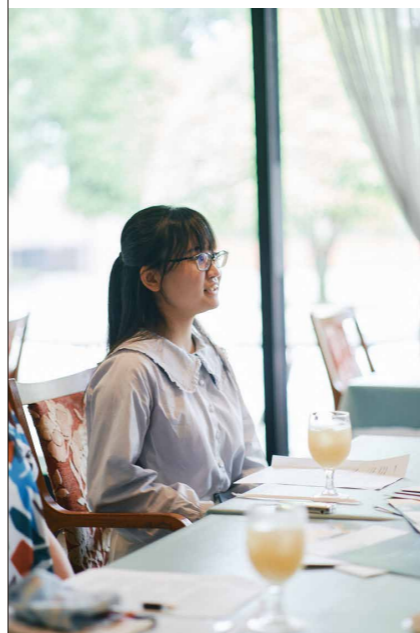


松本…芸術文化はなんらかの形でつながっていますよね。

池田…大勢でひとつの舞台をつくるのは、めちゃくちゃ揉める。裏の自転車置き場で語られるのは、だいたい愚痴。だけど、本番が終わると、それがひっくり返る。

比嘉…多くのジャンルのコラボは、やっている側だけでなく、観客も刺激を受けます。私はもともとボーカloid

ジャンルが違う人たちとやることで達成感はずっと大きかった。今はそれができないのが寂しいけれど、県劇が企画を出してくれるから、がんばろう、という気持ちになる。



大変なことであればあるほど
達成感は大きくなる。

これからの舞台は、
“ワクワクする”方向へ

伊沢…ただそんな中でも、小さな舞台をご家族だけに向けて企画開催したんです。それが保護者から喜ばれて、「バレエを習わせてよかった」という言葉をもらい、みんなが前向きになれる舞台でした。

池田…観客のいる公演は、それがありませんよね。県劇には自主文化事業があって、これがめちゃくちゃ楽しい。ジャンルを超えたコラボによって刺激を受けることもあるし。いろんなジャンルの方の、体の動かし方の工夫や、



が大好きでニコニコ動画を見ました。歌、舞、歌とコラボする企画があった、それがきっかけで歌舞伎に興味をもちました。芸術文化には興味ない人だって、敷居が高くて劇場に行く機会がない人だって、コラボで自分に興味があるものがあれば、観に行ってみようかと思う人がいると思うので、そういうイベントがあったらいいな、と。

池田…以前、県劇の光庭横で「ケンゲキアットライブ」というイベントが開催されていて、通りがかりの人が立ち寄りたりして、生の芸術文化にふれるきっかけになっていました。大学生が県劇事務所に入り浸ったりしていた。今からは、劇場と若手がつながるシカケをつくってほしいね、と。

伊沢…県劇は野外公演のような雰囲気も味わえそうなので、子どもたちの発表会みたいなこともできるし。

池田…アーティストそれぞれが自分を持っているものを持ち寄って、みんなで発表できるようなお祭りがあったらいいですね。

上村…少しずつつまみ食いできるような体験会などが開けたら、子どもたちにとっていろんな芸術にふれられる機会



大勢が関わる舞台は揉める。
だけど、終わった後に
それがひっくり返る。

違う部分で勉強になることもある。違いもあれば、根っこがいつしよのこともあって、その人たちとひとつの作品をつくるのがすごくいい。

上村…それ、わかります。10年以上陸上短距離をやっていたので、楽器を演奏する時の体の動かし方に取り入れたり。違う分野だからこそ活かせることがあったりしますね。

池田…この筋肉は短距離の筋肉だったんだ(笑)。もし、今後合同公演が実現できたら、上村くんを最初に演劇にひっぱりたいわ。

伊沢…体幹しっかりして、筋肉があるから、ここで踊って、とか(笑)。

池田…コラボするって、楽しいですよ。

伊沢…日舞や邦楽と一緒にすることがあって、出演する子どもたちにとっても「こんな世界があるんだ」と一緒にできることが楽しいわけです。オーケストラの生演奏に合わせて踊ることでもワクワクすることもある。

になりますね。スマホで聞くよりも、生の音楽を体感できるきっかけ。床の音の揺れや、空気の振動とか。生の音楽にふれた時に感動したことを、今でも覚えています。それを子どもたちに伝えたい。

松本…合唱団の中で歌ってもらう体験だった。普段の公演では体験できないことだからおもしろそうですね。

上村…お祭りといえば、文化祭の時に「ツン・デレ・ラ」というパロディ劇をやったことがあって。陸上で鍛えたバッキバキの筋肉で、女の子役やりましたね。オーケストラと全く関係ないですが。

池田…それでいこう！次の自主文化事業の企画(笑)。

Highlight

ホワイエサロンコンサート Vol.1
有島京 & 伊藤悠貴
デュオリサイタル

5月21日(土)
コンサートホールホワイエ

一期一会の出会いが生んだ
やさしさに包まれた演奏会

天井まで届く窓の向こうには、新緑萌える木々が茂り、屋内にいながら外の雰囲気を感じることができ、コンサートホールホワイエ。ここで、熊本県立劇場文化事業・ホワイエサロンコンサートの1回目が開催されました。出演は、人吉市出身のピアニスト・有島京さんと国内外で活躍するチェリスト・伊藤悠貴さん。初共演とは思えないほど息のあった演奏が、屋下がりの微睡の時間、心を温かく、そして豊かにしてくれました。

窓際をステージにし、200席を設けた今回のコンサート。客席から少し見上げたステージに立つふたりのアーティストは、窓いっぱい緑の背に演奏され、木々がまるで曲に合わせてリズムをとっているかのよう。有島さんがソロで演奏したリストの「エステ荘の噴水」は、水が豊かな熊本と緑に包まれたホワイエの雰囲気



時間や季節で趣が変わる窓の外の木々たちも、大切な演奏者

に合わせて選曲されたものでした。この日は、カラッと晴れた初夏の陽気。時間の経過と共に、日の差し具合も変わり、木々の色合いも変わっていきます。これらの景色とアーティストとの共演も、まさにホワイエの魅力なのです。

さらに、コンサートホールとは大きく異なるのが、アーティストとの距離感。ふたりの息遣い、楽譜をめくる音を感じ、ピアノや弦にふれる繊細な指先の動きを目にすることができ、まさに五感で堪能するコンサート。観客のみならず、一曲一曲、どんどんとお二人の世界に引き込まれていき

演奏者自らも「心地よい」と感じ演奏できるのも、ホワイエの魅力



ます。それだけでも感動なのですが、驚くのが音の感じ方。小スペースながら天井が高いホワイエでは、音を浴びているような感覚になります。ピアノで水を表現する場面では、どこかで滴が落ちていると錯覚するほど。有島さん、伊藤さんの奏でるピアノとチェロの音色に包まれながら、あつという間の1時間を過ごしました。

県立劇場では、2021(令和3)年4月より新しい施設の使用区分を設け、ホールの部分利用をスタートし、練習や小規模公演など、多様な使い方ができるようになりました。その魅力を体感していただくために企画したのが、この「ホワイエサロンコンサート」です。今回を皮切りに、次回は8月27日に尺八奏者の藤原道山さん、ピアニストの青山政憲さんのコンサートが控え、その後もさまざまなアーティストをお迎えした企画を計画しています。

Artist comment

コンサートホールでの演奏は何度も経験してはいたのですが、ホワイエでの演奏は初めて。スタインウェイも古いもので、温かみもキラキラとした輝きも表現できました。さらに、会場の音の響きも心地よかったです。そして、距離感がいい。私は、お客様の表情が見えて、呼吸を感じることができて、一緒に演奏会をつくり上げることができ、ホワイエが好きです。音楽はひとりでも成立するものですが、ネット社会でどこでも簡単にダウンロードできる時代、さらにコロナ禍で集えなくなり、より演奏会の意義を考えるようになりました。窓いっぱいに見える新緑などの会場の雰囲気、お客様一人ひとりの表情や呼吸、そして私たちの演奏、全てが揃って演奏会が完成すると思っています。それは、毎回同じではなく、かけがえない「出会い」によるもの。こは、それを感じることができるところです。ずっと続いてほしいです。



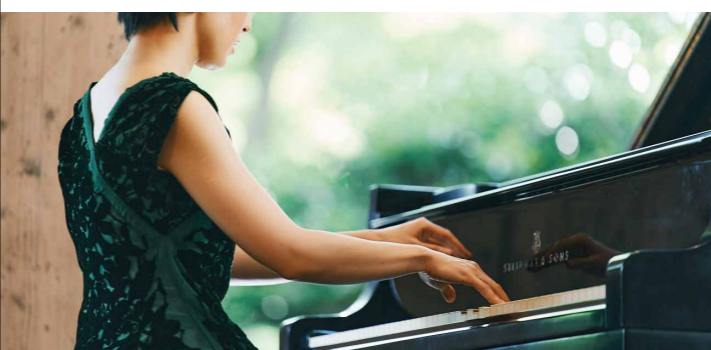
ピアニスト
有島京
【ありしま みやこ】

人吉市出身。高校卒業後、ポーランドへ留学し、「第17回ショパン国際ピアノコンクール」出場後、ビドゴンチ市長より特別賞を受賞ほか、さまざまな賞を受賞。コロナ禍で活動拠点を人吉に移し、2020年よりサントリホール室内楽アカデミー第6期フェローとして活動。2022年秋からヨーロッパでの活動を再開予定。



Instagram

繊細な動きまで感じられる、観客と演奏者の距離の近さ

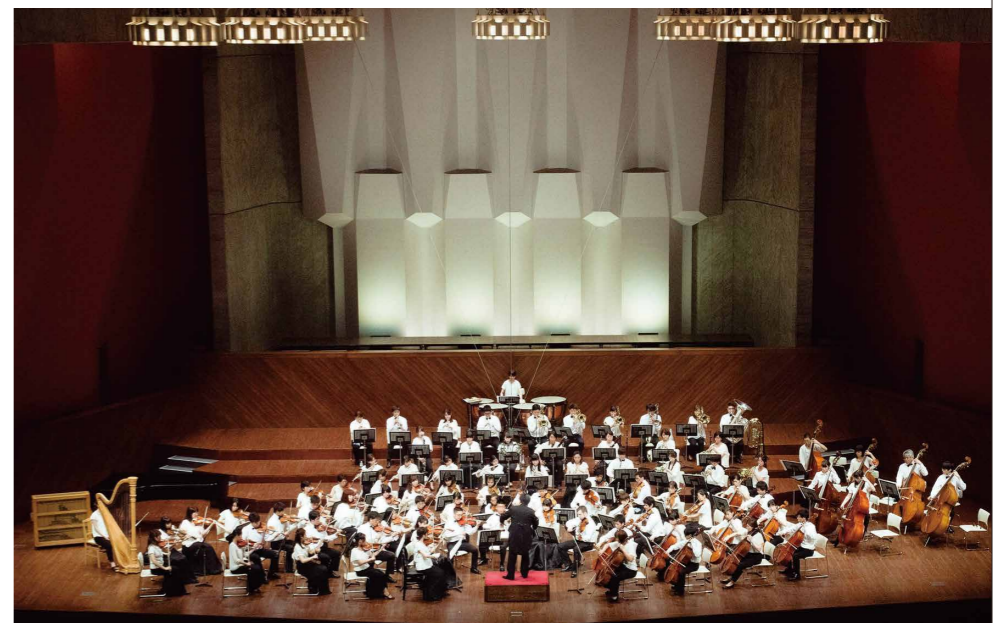


熊本ユースシンフォニーオーケストラ

音楽の素晴らしさを伝え、
幅広く「育成」に関わり続けたい

「子どもの頃から、本物の音楽にふれてほしい」。そんな思いを礎に活動している「熊本ユースシンフォニーオーケストラ」は1964（昭和39）年に創立。音楽をこよなく愛し、熊本に音楽の土壌を耕したいと、ある屋台で飲みながら熱く語り合った20代の若者4人の思いが原点にあります。「上村先生、猪本（乙矢・耀子）ご夫妻、日地先生の「創始者」の4人が、将来の音楽業界のことを熱く語り合った屋台の話が、今でも語り種になっています」と、3代目理事長である山口邦子さん。

を感じられますね」と山口さん。そんな山口さん率いる熊本ユースシンフォニーオーケストラの次なるステップは、少子化の社会情勢を踏まえた音楽育成活動の強化です。そのひとつとして、今年からジュニアオーケストラを開設し、より早い段階から音楽にふれる機会を広めていく活動に注力しています。「北海道で青少年オーケストラ協会を運営する男性がいて、あの広大な北海道の地域をまわって指導活動を行う姿に刺激を受けました。音楽活動と育成活動の重要性を感じ、もうひとつの受け皿としてジュニアオーケストラ開設に至りました」。熊本ユース出身の団員たちは演奏家として活躍している人も数多く、卒団後も指導に取り組む人もいます。新しくジュニアオーケストラが開設されたことにより、今後は、小学生から高校2年までの音楽経験が浅い人でも入団でき、より音楽の門が広く開かれることとなります。



熊本ユースシンフォニーオーケストラ 理事長
山口 邦子
[やまぐち くにこ]

「第53回熊本ユースシンフォニーオーケストラ定期演奏会」は、8月28日（日）に県立劇場コンサートホールで開催予定です

入団オーディションや演奏活動についてはホームページをご覧ください



演奏と同じように、部員集合写真の決めポーズも息ぴったり

熊本市立必由館高等学校 和太鼓部

初心者から
スタートして
全国屈指の演奏へ

「運動に例えたら、800メートルを全力疾走」とある生徒が発言した通り、和太鼓の演奏はわずかな数分の間で、太鼓を演奏しながら、周りと協調し、踊り、跳ねて精悍な動きを表現していくスポーツのようでもあります。全国大会で頂点を幾度も獲得し、必由館高校の部活の代表格でもある和太鼓部は、2001（平成13）年に誕生。当時の校長から「中学まで経験していない初心者でもできる部活動を」という依頼を受け、部活動創立に携わった顧問の鹿子木賢輔先生も和太鼓初心者。部員集めもひとりずつスカウトして、12人の生徒からのスタートでした。「和太鼓部のきっかけとなったのが、その年の4月に県劇で開催された高校の90周年式典です。箏曲や新体操の舞台で和太鼓を演奏したらどうか、という声があがり、代継太鼓保存会の上野秀喜さんに指導していただき、3年生の4人の生徒が代表で演奏しました。まだ部として活動してなかったの、ゼロ代目にあたります」と、鹿子木先生は当時を振り返ります。

今年も全国の
頂点をめざして
練習に励む

初心者集団からはじまった和太鼓部が、全国高校総合文化祭で国立劇場の舞台に立ったのが2008（平成20）年のこと。創立からわずか7年で偉業を達成し、それ以来全国大会へ9回出場し、うち6回は文部科学大臣賞1回、文化庁長官賞5回で国立劇場出演を果たしました。2022（令和4）年は、部員40名で全国制覇を狙っています。部活動の伝統として受け継がれている「肥後の鼓舞」というオリジナルの演目は、前年のものを完全コピーした上で、その年の生徒の解釈によって、自分たちの代だけのものに仕上げられています。このため原曲が出来上がって約20年の間に、どんどん進化しています。また、生徒同士の交流も深く、先輩から後輩への指導も熱いため、後進の指導を買って出る卒業生もいるほどです。和太鼓部を目的に高校入学を選んだ部長の坂田美依菜さんは「憧れて入部しましたが、入ってみて全国レベルのすごさを知った」、祖母から勧められて入部した副部長の矢野良々佳さんは、「私たちの力強い演奏を見て欲しい」とそれぞれ語ってくれました。



部長の坂田美依菜さん（右）と、副部長の矢野良々佳さん（左）。今年開催される高校総合文化祭に向けた熱量はかなり高まっている

OPEN! BACKSTAGE

コラムでつなぐ交流の場

舞台さんのお仕事道具 スピーカー

学校や会社など、どこにでもあるスピーカー。皆さんも色々な場所で見ていると思います。劇場にも沢山のスピーカーがありますが、今回は代表的な2種類のスピーカーを紹介しましょう。

ひとつはお客様に音を届けるためのスピーカー。もうひとつは舞台上立つ演者が聴くためのスピーカー。異なるふたつの音環境を調整するために、音響スタッフの仕事も、ハウスポレレーターとモニターオペレーターとに分かれています。催し物によっては、それぞれ1人ずつスタッフが付く場合もあります。

客席向きのスピーカーはプロセニアムスピーカーとサイドカラムスピーカーの2種類。スピーカーが付いている位置に応じて呼び方が違います。

演者向きのスピーカーはフットスピーカーとサイドスピーカーの2種類。フットスピーカーはステージ上、演者の足元に置いて主にバンド公演などで使用します。サイドスピーカーは舞台袖に立てて主にパレエヤダンス公演などで使用します。

1990年代頃、無線や電波シス



左)dBbE12 右)d&b M6

あなたの楽器見せてください Rapport Wind Orchestra コンサートミストレス サクソフォーン奏者 坂上 知花(さかがみ ちか)

テナーサクソフォーン

私は中学入学時に吹奏楽、そして、テナーサクソと出会いました。楽器店で一目惚れして、これまで10年間、テナーサクソ一筋で吹奏楽をしてきました。楽器特有の気のある艶やかな音が魅力的です。「さらに技術を磨きたい」一心で、テナーサクソと向き合ってきました。

高校までは学校の楽器を使っていたため、部活引退後、楽器を手にする機会がなく、さみしい思いをしていました。が、大学入学時に親から楽器をプレゼントしてもらい、自分の楽器で吹奏楽を続けられることになりました。その時購入したのが現在使っているヤマハのカスタムEXシリーズです。この楽器は多くのプロの方も愛用していて、心地よい吹奏感と柔らかくて暖かい音色がとてに気に入っています。

現在は、大学の吹奏楽部に所属しながら、県内の大学生が集まる「Rapport Wind Orchestra」にも参加しています。これから先もこのテナーサクソと一緒に色々な曲に挑戦して、たくさんの方々に楽しんでもらえるような演奏ができればと思っています。



サクソフォーン
YAMAHA YTS-875EX

坂上 知花
[さかがみ ちか]
Rapport Wind Orchestra
コンサートミストレス
サクソフォーン奏者

県劇スタッフリレーコラム 事業グループ 宮本 帆士(みよと ふうし)

「成長の喜び」

令和2年の4月1日から入職した私の所属は事業グループ。これまで芸術に縁もゆかりもなかったため、何もわからない状態でデスクにつき仕事を始めた。

大学卒業後高校国語の講師として勤務していたが、紆余曲折あり熊本県立劇場で働くことになった。事業グループの主な仕事は自主事業の企画・運営。今は人材養成事業に携わることが多い。県劇では将来芸術に携わる人材が増えるよう様々な事業を展開している。青少年を対象



として、実演家やいわゆる裏方の仕事をやる舞台スタッフの養成を目標としている。チラシの作成から広報、アーティストとの連絡調整、当日の運営やタイムスケジュール管理と業務は多岐にわたります。大変ではあるが、実りも多い。参加者が目

を輝かせながら、学び成長していく様子を見ることができるとき、これまでの仕事が報われたように感じ、何事にも代えがたい達成感を味わえる。

勤務を始めて3年目の今年、将来の舞台技術者を養成する「舞台技術の基礎講座」では受講生に8の字巻きを教えることができた。これはケーブルの巻き方で、同じ方向にケーブルを巻いてしまうと、捻れて、伸ばした時に絡まってしまい、断線する可能性が高くなってしまいます。この8の字巻きは舞台スタッフとして必要なスキルとのこと。慣れてしまえばなんてことはないが、少しコツがいるこの巻き方を、まさか自分が教える立場になれるとは思っていませんでした。自分の成長も感じることもでき、喜びはひとしおである。

転職という大きな人生の転機を迎え、何もわからない状態から少しずつ成長することができている。生涯学び続け、これから自分自身も成長を続けていきたい。身長も170センチと公言しているが実際は、あくまで現時点では169.8センチ。いくつになっても人は成長できるため、きつともう少しすれば堂々と170センチと伝えられる日が来ると信じている。成長の喜びを感じたい。

寄稿

開館40周年記念コンセプトムービー
監督・撮影・編集
株式会社
映gent Roman
代表取締役
中川 典彌



熊本で生まれ育った私にとって、熊本県立劇場の開館40周年記念ムービーを制作することは夢のような話だった。

最初に県劇スタッフの皆様にご挨拶をし、中を案内していただいた時のことを鮮明に覚えている。洗練された建築、歴史を感じる香り、そして、働く人々が自然と奏でる環境音。何度も訪れたことのある県劇の一つひとつに感動を覚える中、その様子をスタッフの皆さんが心から喜んでくれ、目を輝かせて数々の魅力を語ってくれた。僕ら以外には誰もいない空間だったが、僕には演者や観客、緊張や涙、輝きや拍手が確かに見えた。プロには溢れ出る夢を感じ、受け取り、また新たな夢を描く人々、文化芸術によって生まれる「人生を変えるほどの瞬間」のそばには、表現者と観客、それをサポートする方々の存在がある。

今回の作品では「県劇II人」を自分の中で大切なテーマに掲げ、県劇スタッフの皆さん、統括してくれた原田さん、全ての音楽を担当してくれた鎌田さん、建築の観点からもサポートしてくれたフォトグラファーの橋本くんをはじめとする心強いチームが一丸となり作り上げた。2分27秒という短い時間の中で、歴史・人・感謝が伝わる作品になっていれば嬉しい。

僕は、撮影中に見せてくれた舞台に向かう後ろ姿、40年間県劇で動けた本田さんの最後の一礼、作品を演劇ホールで上映した時の県劇の皆さんの表情を一生忘れることはないだろう。新たな一歩を踏み出した県劇が、次はどんな輝きを見せてくれるのか、心から楽しみでならない。



開館40周年
記念ムービー